

OECD PISA 最新結果 アジア・ローンチ・シンポジウム

開催報告レポート

2023年12月6日、東京大学にてOECD PISA最新結果アジア・ローンチ・シンポジウムが開催されました。主催は東京大学公共政策大学院ウェルビーイング研究ユニット、共催として当財団が協力させていただきました。

PISA (Programme for International Student Assessment) は、OECDが加盟国の15歳の生徒を対象に、読解リテラシー・数学的リテラシー（今回の中心分野）・科学的リテラシーの三分野について、3年ごとに実施している調査です。新型コロナの影響で1年遅れで実施したPISA2022には、81カ国・地域から約69万人、うち日本からは183校（学科）、約6,000人が参加しました。シンポジウムでは、OECDパリ本部時間12月5日に発表されたばかりの調査結果について、日本・オーストラリア・インド・中国（香港）の教育専門家に登壇いただき、特にアジア諸国に焦点を当てて調査結果やその分析を発表するとともに、未来の教育の課題についてディスカッションを行いました。

主催者・共催者・ご来賓 ご挨拶

まず主催者の鈴木寛氏（東京大学公共政策大学院教授、OECD教育2030 Bureau Member、三菱みらい育成財団理事）が、「PISAは21世紀の教育の在り方を真剣に考え、アカデミックパフォーマンス、エクイティ、ウェルビーイングなど広範な観点から練られた調査。このシンポジウムでPISAの真髄を深く理解いただき、これからのアジアの教育が発展するために皆様方の糧にさせていただきたい」と挨拶されました。続いて共催者であるOECD事務次長の武内良樹氏が、アジア諸国の結果・分析を説明された後、「将来を担う若者の学びを支援し、未来を見据えた教育制度をつくることが我々の大事な目標です。教育のエビデンスを最大限に生かし、次の世代が最善の教育を享受できる機会をつくっていききたいと思っています」とご挨拶されました。

三菱みらい育成財団常務理事の妹背正雄も共催者としてご挨拶させていただきました。当財団の事業を紹介させていただくとともに、「私自身、30年前に受けた高校教育や大学での教養教育と比べて大きく進化していることを実感していますが、それについて企業人は人事担当者も含めてあまり関心がない。先生方には地域や企業など外部と繋がっていただき、地域や企業は教育現場により関心を持って入っていくという好循環をつくっていききたい」とお話しさせていただきました。

来賓の文部科学審議官の藤江陽子氏からは、「ポストコロナの学びや学校の在り方について考えることは各国共通の課題。本日のシンポジウムにおいて、この点を含めて活発で実りある議論がされることを期待しております」というご挨拶を頂きました。



主催者挨拶をされる鈴木氏



当財団の妹背も共催者として挨拶をさせていただきました



一般財団法人

三菱みらい育成財団

第1部 PISA2022の結果の概要： 国際比較から見えるアジア各国の現状と課題」

OECD教育スキル局就学前・学校教育課長の小原ベルファリゆり氏から、PISA2022の概要について以下のような報告がありました。

- ▶全体の平均値を見ると、2018年の調査時と比べ、読解で10ポイント下がり、数学では15ポイント下がっている。下降傾向がグローバル的に見られたにもかかわらず、アジア経済圏の上位6カ国は相対的に非常に高い学習到達度を示している。
- ▶教育に対する投資と平均学習到達度には関連が認められるが、必ずしも投資額が高いからといって比例して学習到達度が高いとは限らない。
- ▶授業と宿題に費やしている1週間当たりの平均時間は、24時間と11時間になっている。しかし時間をかけたことが成果と比例するわけではない。教育の質が重要だということが分かる。
- ▶数学は、女子より男子の方が優れているといわれることがあるが、実際はPISAに参加している半分の国にしかそのような傾向は見られない。
- ▶このコロナ期間にあっても、数学、公平性、ウェルビーイングの三つの面で、日本、韓国、リトアニア、台湾は高いレジリエンス（柔軟性）を見せている。学校閉鎖期間があまり長くなかったこと、また学校と家族のサポートにより効率的なリモート学習の体制が取られていたことが要因だと思われる

その他の詳細、当日の資料はこちら



PISA2022の概要について話す小原ベルファリゆり氏

第2部 パネルディスカッション

第2部では前半「次世代を担う生徒の学び」と後半「生徒のウェルビーイング～エージェンシーをいかに支援するか？」についてのパネルディスカッションが行われました。

前半は植阪友理氏（東京大学教育学部准教授）がモデレータを務め、パネリストとして、小谷元子教授（東北大学理事・副学長、数学者）

Dr. Michele Bruniges（オーストラリア、PISA 理事会議長、元豪州教育大臣）

井手 和成氏（三菱重工業株式会社デジタルイノベーション本部 CIS 部部長）

床勝信氏（元岡山県中学校校長（数学））

に登壇いただきました。

今回の中心分野である数学に焦点を当ててディスカッションいただきました。

◆数学をめぐってどのような課題があるか

小谷氏：欧米では数学者が人気職種上位にあるなど、数学スキルを社会で生かしていくことに大きな価値が置かれている一方で、日本ではそうではない。何かモヤっとした複雑な事柄について問題を整理し、どこに注目したらいいかという考える力が数学をやっていくことで一番身につく能力。これはこれからの社会でも求められる力ではないか。

井手氏：会社で解く問題というのは答えが出たところからがスタート地点で、この答えに対して皆でディスカッションをしていきたいのに、答えを出しました、以上ですと言われてしまうのが一番困ってしまう。

Dr. Bruniges：低学年の時に算数を学ぶことの楽しさを教えること、また教師が算数を現実社会と絡めていくことが必要。

床氏：小中学校では算数・数学の楽しさが忘れ去れている。やり方だけを教えてあとはその繰り返しの練習になってくるので、子どもたちはやり方だけを覚えて、なんでそうなのかが分からなくなっている。

◆数学に関して男女の性差はあるか

Dr. Bruniges：女子の方が男子よりもモチベーションが高いが、失敗に対する恐れは女子の方が高いという2018年のデータがあり、今回も同じような傾向がある。この恐れを克服する取組みが重要。

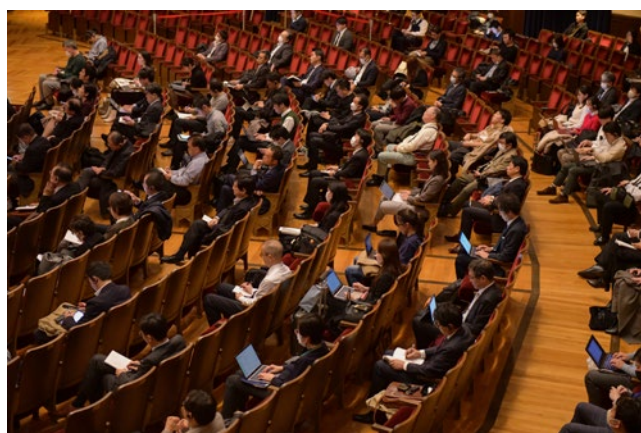
床氏：先生も失敗をさせないような質問をすることもあり、それがかえって子どもたちの自信のなさにつながっている可能性がある。

小谷氏：日本はキャリアのパターンが単調で、一歩でも踏み外すと戻れないという風潮があり、特に女性は妊娠・出産があるので典型的なロールモデルが根強くあることも一因ではなどの指摘が出ました。

その他、三菱みらい育成財団主催の理系の女子高校生を対象にしたオンラインセミナー「RIKEI ブロッサム」や、ピアサポートの重要性として東北大学とUCLAの学生による協働プログラム、床氏が数学の面白さを理解してもらうために実際に現場で行った試験内容の事例などの紹介・共有が行われました。



(左から) モデレータを務めた植阪友理氏、パネリストの小谷元子教授、Dr. Michele Bruniges、井手 和成氏、床勝信氏



当日の参加者は、会場の来場者、オンラインでの視聴者あわせて約1,300人となりました

後半は鈴木寛氏をモデレータに、パネリストとして、
Dr. Vinod Rao（インド、グジャラト州教育大臣）
Dr. Christine Choi（香港特別行政区政府教育長官）
内田由紀子氏（京都大学教授、京都大学人と社会の未来研究院院長 中央教育審議会委員）
宮本久也氏（全国高等学校校長協会事務局長、前・東京都立八王子東高等学校統括校長、三菱みらい育成財団アドバイザーボード委員）
にご登壇いただきました。

まずはDr. Choiから香港教育局が取っている生徒のウェルビーイング、またChatGPTや生成AIの課題に対する対策について、Dr.Raoからは出席や学習進捗を把握するためのオンラインリアルタイムモニタリングシステムについてご紹介いただきました。

内田氏からは、次期教育振興基本計画策定の中で、ウェルビーイングの定義や測定方法、学校という場のウェルビーイングについて検討した経緯や狙いについて説明があり、今後はエビデンスをしっかりとっていくこと、強みと弱みの分析をその背景にある文化的な価値観との整合性も含めて捉えていくことが重要だというお話を頂きました。

また2012年から10年間、高等学校校長を務められた宮本氏からは、少子化による地方校の統廃合、不登校の増加、自己肯定感の低さといった課題がある一方で、2018年の学習指導要領の改訂、探究活動やICTの導入と環境が大きく変わり、授業の在り方も着実に変わってきているという報告がありました。

各国の報告を踏まえ、登壇者やモデレータからは、各国の強みや弱みを提示してくれたPISAの結果をスタートラインとして、教育関係者だけでなく社会のさまざまな人を巻き込んで議論して、より良い教育を目指していく決意が語られました。



(左から) モデレータの鈴木寛氏、パネリストのDr. Christine Choi、内田由紀子氏、宮本久也氏



Dr. Vinod Rao にはオンラインで参加いただいた

クロージング

プログラムの最後に、勝野正章 東京大学教育学部長から、まずは登壇者の方々、シンポジウムのオーガナイザーの方々、協力された学生の方々への感謝が述べられ、「今回のこのシンポジウムというのは、探究を皆さんで行っていく第一歩、スターティングポイントだと思いますので、今日ご参加の皆様はここでの感想を、周りの方とお話しいただいたり議論をしていただければと思います」と挨拶されました。

続けて上田奈生子 OECD東京センター所長は、「本日のディスカッションを通して、データ、モニタリング、またエビデンスの力という言葉が私の頭の中をめぐっています。OECDでは、ニュートラルな形でのエビデンスを集めて分析をしていき、それを基にして政策提言を出していきます」とご挨拶されました。

終了後には、懇親会が開かれ、登壇者や参加者の皆さまに親交を深めていただきました。



クロージングの挨拶をされる勝野正章 東京大学教育学部長



上田奈生子 OECD東京センター所長



懇親会での武内良樹 OECD事務次長による乾杯



シンポジウムには高校生にも参加していただきました